

【書評】

角田将士著『戦前日本における歴史教育内容編成に関する史的研究
— 自国史と外国史の関連を視点として—』

(風間書房, 2010年) 8,000円

梅津正美

(鳴門教育大学)

本書は、角田将士氏が2005年に広島大学に提出された学位論文を公刊されたものである。本研究の目的は、明治5(1872)年の学制発布から昭和20(1945)年の太平洋戦争終結までの日本の戦前期における中学校用の自国史及び外国史教科書の分析を通して、歴史教育内容編成の史的展開を説明するとともに、今日の歴史教育のあり方に対して改革提案を行うことである。

角田氏は、この目的を達成するために、次のような研究方法をとる。第1に、対象とする戦前期の自国史及び外国史教科書を、その採択数と教育内容の典型性から選択する。第2に、自国史と外国史の分立構造を視点に、①準備期(明治前期: 明治5年～明治14年)、②始発期(明治中期: 明治14年～明治27年)、③変質期(明治後期から昭和戦前期: 明治27年～昭和19年)、④崩壊期(昭和戦中期: 昭和19年～昭和20年)に時期区分する。第3に、「伝統としての歴史」と「認識としての歴史」という歴史認識論を分析枠組みにする。第4に、教科書記述の分析方法として「知識の構造」を活用する。

本書は、以下の章から構成されている。

- 序章 本研究の意義と方法
- 第一章 自国史と外国史の関連から見た戦前期歴史教育の時期区分
- 第二章 準備期歴史教科書における教育内容編成
- 第三章 始発期歴史教科書における教育内容編成
- 第四章 変質期歴史教科書における教育内容編成
- 第五章 崩壊期歴史教科書における教育内容編成
- 第六章 自国史と外国史の関連から見た戦前日本における歴史教育内容編成の史的展開
- 終章 総括と課題

結論は、次のように導かれる。①明治前期において、自国史と外国史の教育内容は、並列的個別的な構成をとり、「事実としての歴史」を認識す

るものであった。②明治中期に自国史と外国史の分立構造が成立し、前者が「伝統」に、後者が「認識」に依拠することで別々の教育的役割を担った。③明治後期から昭和戦前期には、自国史と外国史の分担構造が維持されつつも、国策の転換に対応して自国史重視へと傾斜し、「伝統としての歴史」を強化するように自国史教育内容の修正がなされた。④昭和戦中期には、外国史を包摂した自国史中心の内容編成により、「伝統」の認識を基盤とする戦時対応的な国民意識形成が徹底した。

本書の最大の意義は、社会科教育学研究として歴史教科書の内容編成史研究の方法を明示したことである。時代の教科書を、所与の理念や制度から解釈し特徴を論じるのではなく、記述内容における事実・解釈・価値(規範)の連関を確定し、歴史認識形成の論理を見定め、その特質と問題点を指摘していく方法は、社会科教科書(史)研究方法論のひとつの型になるであろう。評者は、著者の方法論は、歴史叙述を事例とした、批判的思考力育成のメタ・ヒストリー学習の授業構成にも応用できると考えた。

最後に、本書の課題と著者への要望を述べたい。著者は、本研究の成果をふまえて、現在の歴史教育内容編成の改革提案として、各時代をひとつの社会としてとらえ「横の(共時的な)歴史」として自国史と外国史の内容を統合していくことを述べている。この提案は、戦前期教科書の分析から導くにはやや論理性を欠き、内容も抽象的である。「横の歴史」を編成する理論的枠組みは、世界システム論や比較文明史のようなものか、それとも地球的規模の社会問題などを想定するのか。自国史と外国史の統合という場合、National Historyの枠組みは残るのか、解体されるのか。質問が多くある。著者の今後の研究の発展を通して見解が示されることを期待するものである。